―――― 文章見本 ――――

空の轍（わだち）

漆

（前略）

山中の敵基地急襲に出動する前、作戦行動を共にする別の隊と顔合わせをしたが、その隊長であるこの人物は訓辞その他全てを副官に任せ、自分は顎髭に手をやりながら一同に視線を投げていただけであった。きびきびした副官とは対照的な、もっそりとしたその時の雰囲気は、今は微塵もなかった。

凍てつく空気をも斬り裂く彼の刀が、高度を下げていく陽光を反射してギラリと輝く。その反射光すら当たった物を斬ってしまいそうだった。

「凄いな。どうやったらああいう動きが出来るんだろう」

眩しさに目をすがめつつ、シチロージは思わずため息を漏らした。

再び視線が交わった時、こちらへ来いと合図されたような気がして、シチロージは敵の刀を払いながら声の届く位置へと移動した。

「しんがりを務める」

初めて耳にした彼の声は、思いがけない命令を下した。
「…我ら二人で、でありますか？」
シチロージは思わず周囲を見回した。
「そうだ」
二人からは離れた斜面に彼の副官とその配下の者達、また別の斜面には自分の所属部隊。そして明らかに、全員が退却の態勢に入っていた。それならばおそらく、尾根の向こう側に展開している別の協同隊も同様だ。
（一体いつ、退却の命令が出たのだ？）
こちらが優勢とは言え、敵はまだ少なからず残っている。これをどうやってたった二人で食い止めるというのか。
刹那応答が遅れた間に、彼は再び離れていった。その瞬間、シチロージはあることに気付いた。
この隊長の姿や声は、激しい戦闘を続けているにもかかわらず静かだったのだ。ほんの少し息を弾ませてはいても、彼がまとう雰囲気は静謐とさえ表現出来た。その発見が、新しい命令に信憑性を与え、それを下した人物をおのが隊長と認めさせた。
「確か、島田カンベエ殿と言われた」
顔合わせで、このもっそりとしか見えなかった隊長が名乗ったことをシチロージは思い出した。

彼が発したのはたった一言だったが、それが自分の名前だったのだ。そしてその極めて簡潔な行為も今にして思えば過不足のないもので、背後には透徹した読みや周到な機略の存在が感じられた。

なぜそう思ったのか、シチロージに説明はできなかった。ただその人物が静寂をまとって目の前に在る、それで充分だった。

「島田殿がしんがりを務めろと言われるのだから、自分はまさしく、しんがりを務めるべくここにいるのだ…」

世界中で、これ以上の真理があるだろうか？

「でやあ！」

胸の奥からむくむくと沸き上がってきた感動に衝き動かされ、シチロージは槍を構え直して気合いを発した。